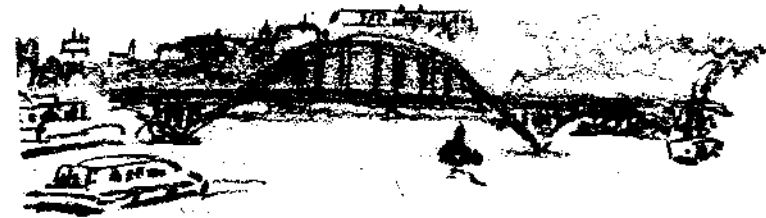


彼岸過ぎ切株をまた埋む雪
 松の根に腰をおろして春探す
 風船を持つ子森より現れぬ
 森ありて昼夜朧の棲むところ
 野の鳥のまりしものよりもの芽吹く
 乗り継ぎて来る人が春もたらせり
 窓を拭く人に親しく囁れり
 老松とこころ分け合ふ暮春かな
 木の芽吹く風なり頬を撫せてゆく
 蘭一鉢置きて自祝の心あり



回想の大野林火

松崎鉄之介

「濱」七五〇号にあたり、改めて大野林火先生の全作品を
 読み返した。普通に読んでもつまらないので、「雪月花」
 「鳥の句」「老いと死」の三つを念頭にメモをとつてみた。
 そこで気付いたことなどを述べてみたい。分析的に読んだ
 ので数字が多くなる。文学を数字で量るのはどうかと思
 うが、林火俳句の傾向や特長を考える手掛かりにはなるだ
 ろう。また、全作品を読みながら思い出したことをエピソード
 として後半に記す。これも林火先生の人間性や風貌を考
 える手掛かりにしてもらいたいと考えたからである。
 なお、「先生」と呼んだり「林火」と呼び捨てにしたり
 する場合がある。文章の流れの中のことなのでご了承を願

う。他の方々の敬称も同様である。

(1) 林火の雪月花の句について

大野林火の第一句集「海門」は次の四句から始まってい
 る。

父母とみて障子に霧のなだるる夜
 秋風にまともな海を怖れけり
 提灯になれてしづかな月夜かな
 地震曇りひるをねてみて蚊に鳴かる

大正十二年の作品で、「関東大震災後 四句」の前書があ
 る。林火は当時旧制第四高等学校（金沢市）に在学中であ
 り、震災の九月一日には第二学期が始まるので金沢市にい
 た。大急ぎで帰省しての、斎藤分町の飯寓での作品である。
 斎藤分町は少し丘がかつた所であり、町は焼けてしまつて
 いたので、まともに海が見えたことであろう。大震災の余
 震が相当長く続いたので、地震曇りも理解出来るのである。
 ここで当時の俳壇にどんな作品があつたかを見てみよう。
 林火が「石楠」以外の作家で最初に触れたのは西山泊雲で
 ある。林火は泊雲の、

松に倚り山焼見るや人も来ず

野火消しの戻りがやがや籬外
を挙げ、その主観的傾向のあらわれに共鳴している。当時「ホトトギス」にどんな作品があったか、大正十三年に巻頭となった方々の一句を並べてみる。

団栗の律に落ちてくゞる音 鈴木 花養
短日の格子明りの帳場かな 西山 泊雲
合羽着て愛宕戻りや花の雨 田中 王城
河骨の花がをかしや夕立中 岩木 露濁
お命講か、はりなしや余所の寺 阿波野青歌
夜の秋を小町寺よりあそび尼 山口 誓子
しぐるゝや僧も嗜む実母散 川端 茅舎
やうやくに倦みし帰省や青葡萄 水原秋櫻子
これらと『海門』の冒頭の四句と比較してみると、全く別の世界の俳人であると思わざるを得ないのである。
大野林火は戦前の「石楠」時代、「薄明境の彷徨者」という評判を得た。『海門』の「昭和七年以前」の章には一〇九句が収められているが、「薄明境の彷徨者」にふさわしい句を拾い上げてみる。
白山風百舌が夕日に流れくる 大13
雪晴や町中に山の影感ず 大12
雪の夜の星のふかさの町に出づ 大13

燕はろばろゆきてそのまま芝暮れし 〃
風の月すぐ更くるかな遠蛙 大12
鳴き鳴きて囀は霧につつまれし 大14
霜夜来し髪きもとのしめりの愛あなしけれ 大15
本買へば表紙が匂ふ雪の暮 〃
花見船とほき巷の風が見ゆ 〃
葉となりしさくらに昼の河溢れ 〃
露の夜のまろろぎ河にぶつかりぬ 〃
木の芽うつる水は流れてゐたるかな 昭2
おねはんの絵のなかにいくるよるかな 〃
いちにちふつか雨降りながし桐の花 〃
凧やうすうすひかる木の根もと 〃
浴衣あたらしく夜の川漕ぎくだる 昭3
まひまひつぶる手のなかにころがされけり 〃
よしきり河越えぬ向ふ岸の霞 〃
霧こむる夜の渡舟わたふねつひに出でざる 〃
雨の花菜寝がへりしてもつめたしや 昭4
昼見ればほそぼそ画かかれ吊燈籠 昭3
みんな去んで空ひかる昼を寝てしまふ 昭4
うすうす見えて案山子雨夜の愁ひあり 〃
雪ふるふる雪のいろ川いちめん 昭5

行々子ふえてくる河きよらかに 〃
あけがたやうすきひかりの螢籠 〃
向日葵の大き花うつりぬし河よ 〃
澄みをるは川こえてきし灯取虫 〃
籠の虫あゆみだす風の中かな 〃
ゆふぐれの枯木に独樂どくらくをぶつけたり 昭6
雪がきてひそかになりし焼野かな 〃
うすぎりのぬかるみかわくひまなき 〃
夜寒さの海へそろひし朧かな 〃
三十三句も挙げてしまったが、まさに「薄明境の彷徨者」の面目躍如たるものがあるう。

あり、「花」の八句よりは多いが、「雪」の四十四句、「月」の二十二句にもおよばない。私はこれまで林火の作品に霧の句が多いと考えていたが、実際に数えてみると思ったほどは多くなかった。「水音のする霧の中」という林火の言葉が先入観となっていたのではないであろうか。なお、『海門』にはその他に「朧」が六句、「霧」が五句出てくる。なぜ「薄明境の彷徨者」と言われたかについては、これらのことも合わせて考えるべきかも知れない。
さて、句集『海門』では雪の句が二十五句あり、月の四句の六倍もある。

ここで考えてみたいのは、林火本人が「水音のする霧の中に身を置けば句はいくらでも出来る」と言っていたことについてである。「水音のする霧の中」ということでは、確かに水辺の景は多い。しかし霧についてはどうかといえ、右に挙げた中には二句にすぎない。次々頁の表①の「霧」の項を見てもらえば分かるように、『海門』に詠われている霧は七句である(ゴチック数字で示した7は秋季の季語たる「霧」のみの数字。右に添えた2は秋季以外の句に出てくる「霧」。以下同)。戦前の作品を収録している句集『海門』『冬青集』『早桃』の三冊を合わせても二十句で

雪すでに一尺となるゆふげかな 昭7
雪となりし野の寂漠に壁へだつ 〃
めしのゆげころよしうす雪ながら 昭8
雪つるのたのしさのともし来りけり 昭9
雪の暮黒き聖衣の匂はずや 昭10
胸もとの銀のクルスも雪の暮 〃
帽深うして雪国へ赴任せり 昭13
破調で彷徨者を思わせる句もあり、エキゾチックの句もあり、ほろりとする句もある。雪の句の多いのは三年間の雪国の金沢での生活が大いに寄与しているようか。句集『雪華』の「巻末に」に「雪華(せつくわ)は雪の結晶形の

うつくしさにひかれるもの多く、それから得た。雪には不思議な郷愁がある。母が金沢生れということ、その縁で旧制四高に学んだこともあるかも知れぬ」と言っている。林火は本来雪が好きで、雪景色を詠むこと自体が好きのようであった。今と違ってその頃は年に四、五回雪が降った。昭和六年以後、林火はさまざま不幸に見舞われる。長男正己の死、妻歌子の死、飛鳥田嬢無公の死、再婚した妻登志子の入院、父正松の死と続く。経済的に困難な日もあり、人生の辛酸を舐めている。環境の変化に加え、三十歳前後となって青年期を過ぎ、さらに昭和十一年八月に八丈島に行き感動を受けたことで、「薄明境の彷徨者」たる句風をかなぐり捨てることになるのである。

ここで本題の「雪月花」に移ろう。まず表①について説明すると、ゴチックの数字は雪・月・花が当季の季語として詠われた句数である。「飛花集」の場合でいうと、「雪(24)」には雪の他に、雪嶺、風花、雪国などが含まれる。「月(21)」には月の他に、良夜、十三夜、待宵、十五夜などがある。「花(25)」には花の他に、さくら、夕ざくら、花冷え、

落花など。一方、それぞれの右に添えた明朝の数字はそれ以外の雪・月・花の句数となる。同じく「飛花集」を例にとると、「雪(7)」には春季である斑雪や、花辛夷とともに詠われた雪片を数に入れた。「月(13)」は春の月夜、五月の月、雪の月夜など。「花(3)」は余花、冬桜である。

表①を概観するだけで、林火の作句の傾向が分かるであろう。すなわち、「雪」は「白幡南町」を一つのピークとして詠われ、「月」は生涯を通し比較的平準して詠われている。そして「花」は晩年になるにしたがって多くなる。雪・月・花の句数(以下、ゴチックと明朝の数字の計で示す)は全部で七三七句で、総句数五〇九三の約一四・五%に当たる。「白幡南町」以後に限れば約一六・八%に跳ね上がるのである。俳人協会の『自註・大野林火句集』は昭和五十年までの作品を取めているが、三〇〇句中の雪・月・花の句は六十六、実に二二%を占めている。この割合は、林火俳句の特徴を表していると思われる。

比較のために手元にあった水原春郎編著「秋櫻子俳句三六五日」と矢島渚男編著「歌柳俳句三六五日」を調べてみたところ、三六五句のうち秋櫻子は二十九句(七・九%)、

表①……林火作品/句集別「雪・月・花」および「霧・時雨・柿」の句数

句集名	収録句数	雪	月	花	霧	時雨	柿
海門	497	25/ 4	4/ 8	3/ 0	7/ 2		
冬青集	254	8/ 4	5/ 7	2/ 0	6/ 2		
早桃	472	11/ 7	13/16	3/ 2	7/ 1		
冬雁	298	6/ 2	24/ 5		2/ 0		
青水輪	425	22/ 3	13/ 8	2/ 1	5/ 1	1/ 0	1/ 0
白幡南町	577	72/ 9	10/ 5	4/ 2	2/ 1		9/ 0
雪華	587	30/ 9	25/10	11/ 3	3/ 2		4/ 1
潺潺集	432	32/14	14/ 9	12/ 0	6/ 0	1/ 0	2/ 0
飛花集	527	24/ 7	21/13	25/ 3	3/ 0	3/ 0	1/ 0
方門集	461	24/ 4	25/ 6	25/ 2	3/ 0	7/ 0	8/ 0
月魄集	563	15/ 6	23/ 6	25/ 4	1/ 0	11/ 3	11/ 0
総合計	5,093	269/69	177/93	112/17	45/ 9	23/ 3	36/ 1

歌柳が二十八句(七・七%)であった。林火の場合、仮に私が代表作品三六五句を選んだとすれば雪・月・花の句の割合はさらに大きくなるのではなからうか。以上のことを踏まえて林火の「雪月花」の句を見ていきたい。

句集『早桃』は昭和十五年より終戦までの作品で、月を詠った句が二十九句ある。その中からいくつかを挙げる。
 夏三日月遊びの群に子を探す 昭15
 月は暈を子はスタンドに本を読む 昭20
 瓜刻む妻夕月に見惚れたり 昭16
 夜勤者に月光の海とほき漁火 昭19
 月にくらく材料待の機械あり 昭19
 雁のこゑ月の干潟にひびき消ゆ 昭18
 人稀れに月光をくる菊供養 昭18
 港山兵の屯す十三夜 昭19
 月よぎるけむりのごとき雁の列 昭16
 これらを読むと銃後のわびしきを感じるのである。臨戦体制に入り生徒を連れて杉山の軍需工場へ通っている。この頃は戦地において、今後の爆薬の補充はないので現在の手持ちで戦えと命令されていた。一方この時代は林火が幼い玲子さんと登志子夫人を一番よく詠った時代でもある。昭和十六年には『現代の秀句』を執筆し、その印税収入

を得て、二回にわたって渥美半島の江比間で家族と共に遊んでゐる。また「高浜虚子」を執筆するため丸ビルのホトトギス発行所へ通うなど、俳人として充実した時代でもあった。

次に印象的なのは句集『白幡南町』における「雪」八十一句で句集の約十四%を占める。それ以前に出版した五冊の句集の雪の句に近い句数を一句集でなしとげている。この句集で一気に雪の句が増えるのは群馬県草津という地縁によるものが大きい。昭和二十六年以来、林火は草津温泉園を足しげく訪問する。草津温泉の外れの山上に存在する衆泉園は豪雪地帯である。しかも高原豪雪地帯であるといつても雪の下に埋もれてしまうような場所ではない。吹越しの地である。元来雪を詠うことの好きな林火には絶好の地である。

まず正月の湯田中での雪の句が七句ある。

息やはらかに降る雪にお晩です 昭30

前年に角川書店の「俳句」の編集を引き受けている。同じく前年に母を亡くしており、この年は喪の正月である。角川書店総務部長の金尾梅の門氏も喪中であつたので、二人して正月を湯田中温泉の中田屋で迎えたのであつた。ちなみに「お晩です」と訪ねて来たのは須坂市におられた栗

生純夫氏である。梅の門、林火、純夫のトリオであつたら、一晚中寝ないで話はずんだことであろう。梅の門は当時「季節」を主宰し、純夫は「科野」を主宰していた。昭和三十一年、林火は「雪の癩園」と題した二十三句を詠っている。

雪に眼がいきいき誰も欠けず逢ふ 昭31

炉に足を焦がすな雪は積むばかり

昏くおどろや雪は何尺積めば足る

雀色時雪は光輪持ちちて降る

落葉松は雪をとどめずさらさら鳴る

長い期間蓄積していたものが一気に溢れ出したようである。同年には続いて「草津にて」として、

藍ふかぶか雪庇にふるる深山空 昭31

雪の水車ごつとんことりもう止むか

など十句がある。さらに草津の温泉旅館大阪屋の副社長中沢晁三氏に案内され、仙人の開拓集落を訪ねている。

雪消えて三百町歩天に近く 昭31

昭和三十三年には「終ひの蔵」と題した中に七句がある。

降る雪に終焉の蔵戸もなしや 昭32

釈一茶不退位雪積む位牌堂

また、昭和三十三年になると村上一葉子君の案内で開拓

団の入植した大日向村を訪ねている。一時騒がれた風土俳句の原点である。

梢々の雪に朝日よ開拓村 昭33

チャペルを丘にかたまる雪の七十戸

覆はれし受難のイエス雪降り

このように、『白幡南町』の時代は林火にとつて雪に執した時代であり、大きな旅を多く持った時代でもあつた。

次に「花」に移ろう。

花ほつほつ夢見のさくらしだけれり 昭40

月光裡しだれてさくらけふらへり

しだれさくら女の囲む中に垂る

私は林火の桜の句というときこの『雪華』の三句を思い出す。とりわけ「女の囲む中に垂る」にこのときの女性(野沢節子・恩賀とみ子)の幸福さを感じ思ふのである。女性と共に囲んでいる林火の幸せも満ち足りているのである。男連れの林火は様にならないが、女性連れの林火は絵になるのである。自註に「雪月花の中の桜が私の句に加わつたのはこの頃からだ」とあるように、一つの転機を示す句でもある。

『潺湲集』には次の句が出て来る。

山ざくら水平の枝のさきに村 昭41

山梨県南部町での作である。林火の没後望月ひろゆき君に案内してもらつたのであるが、どうも場所が判然としない。「水平の枝」の桜はなくなつてしまつたようで、この新鮮な光景は林火の句の中に残るのみとなつた。また次の高遠の桜も印象的である。

仙丈より朝日さくらも濃かりけり 昭43

女人遠流の女人を詠めりさくら散る

「飛花集」になると次の句がある。

いくたびも花冷えいへり旅の妻 昭44

夫人を旅に連れて行かれるようになったのはこの頃である。

湖漁夫にさくら薬降る渚あり 昭44

これは湖北の海洋大崎の湖岸の桜並木を詠つた句。昭和四十六年からは各地の桜に執して遠いところへわざわざ出掛けるようになった。京北町の常照皇寺の天然記念物の九重ザクラも見に行かれたのであつたが、まだ咲いていなかった。

落花追ふ双ヶ丘に飛び行くを 昭44

はそのあと京都に入つてから詠つたものである。

日はあれど淡墨桜宵のごと 昭46

淡墨桜風立てば白湧きいづる

花匂ふ能郷白山の雪の香か 昭48
 薄墨に散りてこの世のさくらならず
 散るを惜しむ淡墨桜しきり散る 〃

これらの句はいずれも根尾の淡墨桜であるが、読むと淡墨桜が生き生きと見えて来る。林火の眼には淡墨桜はまだ衰えていないのである。だが、私の眼には痛々しくてこのように立派な姿には見えなかった。昭和四十八年には私も同行したが、桜の幹があまりにも傷んでおり、花も「この世のさくらならず」の通りで詠う気にはなれなかった。数十本の支え棒によつてやつと支えられており、根元は大きな空洞をなしていた。もともと私は兵隊の時に軍歌の「歩兵の本領」や「同期の桜」で花のように散れとさんざん唄わされ、いささか桜にうんざりしている。兵隊時代の辛苦が心の中にあるので桜を詠うのは気が進まないのである。

余花暮れず山中六戸瀬をはさみ 昭46
 これは「小鳥あまた卯月八日の山中は」に始まる十三句の中の一句で、京北町での作である。この一連には長々しい前書がついているが、『京都大辞典』（淡交社）を見ると林火の前書とはかなり違っている。『飛花集』では次のような花の句が印象に強く残っている。

念々にさくらしだれて地も熱す 昭47
 花散るよやすらひの傘まだ来ぬに 〃

『飛花集』に思い出深い月の句がある。お月見ではなかったが、私は先生だけとしみじみと山上の月を眺めた。

夏炬の火煙草火にして月に出づ 昭44
 夏炬辞すあるじこくりと居眠るとき 〃
 月の山いづれも谷を持つ鬚り 〃
 月の岨天上に行く思ひなる 〃
 風過ぐか山嶺月にはほむらすは 〃

長野の志賀高原の発汗温泉の弁天の湯であった。溝口青於君に依頼されて彼の経営する会社の企業診断をするために上山田温泉へ行つた。先生にも同行願つた旅で、翌日発汗温泉へ行つたのである。夏であったが高原は涼しく、スキー場のゲレンデがあちらにもこちらにもあり、高い所にある発汗は展望台の上にいるようであった。ゲレンデは草原でおおわれているので、大風景を眺望して楽しんでいたが、動くものが何もないので飽きてしまった。スキーリフトで東館山へ登り、私は「夜の秋うすゆき草を頂上に」「山霧らふみやましぐれと云ふ草本」などの句を得た。うすゆき草はスイスのエーデルワイスと同属で、リフトを降りた足許に群がっていた。夕食後は何もすることがないの

で、フロントの夏炬へ宿泊客がみな集まつた。先生はこんなよい山上の月は見たことがないと言つてはペランダに立つていた。右に挙げた句はこの時の作である。このように何の邪魔も入らない一日を過ごしたことはないが、何とも退屈であった。

「方円集」の花の句に移る。
 満齢古稀さくらのもとにけふ一日 昭49
 飛花もろとも消なば消えてもよき齡 〃
 初花のまだ朝日子に紛るるほど 昭50
 花神赫と日を配りけり山桜 〃
 落花舞ひあがり花神の立つごとし 〃
 「飛花もろとも」は三春の滝桜で、「花神」の二句は吉野山である。

白山の神照覧の花の能 昭52
 鼓の音神呼び百花咲かすなり 〃
 花匂ふべしこどもらも能を舞ふ 〃
 能郷の花の能は国指定の重文。「こどもらも能を舞ふ」の新しいは抜群であろう。

不断桜春待つ旅に加へけり 昭53
 この不断桜は伊勢の白子観音にある桜である。
 『月魄集』で次のような句が脳裡に刻まれている。

初ざくら雨ほろと落ちきらと消ゆ 昭55
 落花一片二片三片みづすまし 〃
 散りそめてさまさま桜一夜に瘦す 〃
 半年桜返り花よりはかなげな 昭56
 花満ちて久遠の雲といふべしや 〃
 林氏袁氏花の始終を嘉せしや 〃
 花に逝き遺句集故郷の句に終る 〃
 花終へしとき君もまた逝きにけり 〃
 明日恃めなく花どきもすぎんとす 昭57
 「林氏袁氏」は中国の詩人を迎えた京都での醍醐の花見の席における作品。「花に逝き」と「花終へし」の二句は鳴戸海峡への追悼句である。林火はその死を人一倍悼んだ。これら花の遍歴の句があることによつて林火は老いの淋しさをカバーしていたとも言えるのではなからうか。
 いよいよ『月魄集』の月の句である。先生と月見の宴を共にしたのは志摩半島の安乗であった。
 浄瑠璃の声割れてゆく無月かな 昭55
 月の屋根冠りて木偶の愁嘆場 〃
 道行の木偶につづける月の礁 〃
 人形に泣き足り帰る良夜かな 〃
 無月と良夜がごちやまぜになつていて、分かりにくい

も知れない。夕暮れ時は曇っていて月が出るとも思われなかつたのが、子供らによる安楽文楽が始まる頃になって、まさに名月にふさわしい夜となつたのである。文楽を演ずるのは岬の付け根であつて、三百坪くらいの場所であるが、それを抜けると安楽灯台へ通う岨道である。子供の浄瑠璃を唄う声がよくひびいていた。舞台は急造であるが、毎年催すものであるからしつかりと組まれ、屋根も葺かれていた。文楽の演技は誠に立派であつた。

林火の最後の句集は、「演」に毎月「月魄集」として作品を発表されていたのを纏めたのでおのずから句集名となつたのである。月魄は月の精、もしくは月そのものを意味し、林火としては月魄集という名は当然なのであろうが、私はこれが最後の句集であるという予感を持つていた。しかし、今考えて見ると『雪華』『飛花集』『月魄集』と雪月花を揃えるための命名であつたかも知れない。私は『月魄集』の後記である「刊行に当りて」に「林火先生は『如何に老ゆるか』を自己のテーマに据えられた。そのあらわれが『雪華』『潺湲集』『飛花集』と結集して行つた。雪月花を具体的な対象として、老いの華やぎを求めて行つた。雪月花の最後の月が『月魄集』なのである」と書いた。今回全作品を読み返してみても、その俳人の魂に改めて触れたと思

いがするのである。

雪月花のテーマとは外れるが、林火の晩年によく詠われたものに「時雨」と「柿」がある。

特に執した時雨は『飛花集』に三句、『方円集』に七句、『月魄集』に十一句がある。

しぐれのあととしぐれのあとと峠越す 昭47

二上鳴るかしぐれの風か轟と過ぐ 昭50

満ちて帰る富貴の大堂の時雨の香 昭54

しぐれ恋ふ死を急ぐごと旅続け 昭55

しぐれ追ふ昨日出石に今日間人 昭56

これらの句を見るとすでに死期を悟っているような気がして来る。

「柿二つ」の句など正岡子規も柿が好きであつたが、林火の場合は戦後の『青水輪』以後よく出て来た。

こりこりと柿食む音のはや夜更け 昭29

更けしといふ柿食うてまた更けしといふ 昭51

不勝簪 杜甫より老いて柿啜る 昭57

「不勝簪」の句は林林先生も同席した北京の宿舍での送別会の折の句である。杜甫の享年は五十八歳、その時の林火の年齢は七十八歳であつた。この句に続いて、

柿食うて残る齢は数へざる 昭57
の句のあることを付け加える。

(2) 林火の鳥の句について

句集『海門』の鳥の句といえば、即座に次の五句が出てくる。

白山風百舌が夕日に流れくる 大13

燕はろばろゆきてそのまま暮れし 〃

鳴き鳴きて霞は霧につつまれし 大14

よしきり河越えぬ向ふ岸の葭 昭3

夕千鳥縹渺とわが息澄めり 昭10

また、『冬雁』と『青水輪』はそれぞれ「冬雁に水を打つたるごとき夜空」「鳥も稀の冬の泉の青水輪」から採られた句集名であり、林火には鳥の句が多いものと漠然と考えていた。

そこで鳥の句についても数をかぞえてみることにした。その結果が表②で、四季それぞれに季語として詠われている鳥の句の合計が二四九句、季語以外の鳥を合わせても三五六句であつた。全作品の割合でいえば七・〇%である。比較のために『秋櫻子俳句三六五日』と『楸邨俳句三六五

日』を調べてみると両著ともに鳥の出でくる句は三十五句でほぼ一割に近い。私としては林火の鳥の句はもつと割合が多いと思つていたので、どうやら勘違いのようである。しかし折角なので林火の鳥の句を見ていきたい。ちなみに、『海門』の中で一番多い鳥の句は燕の七句で、春の鳥はこれしかない。続いて行々子(葭切)の六句、鵲の五句。二句の仏法僧と水鳥以外は、鶺鴒、閑古鳥、夏鳥、秋燕、四、鶺鴒、小鳥、寒雀、千鳥が各一句で、この他に季語として詠われていない雀などが五句あつて全部で三十六句、全句数四九七に対し七・三%である。まことに数も少なく種類も乏しい。

次に『早桃』を見ると、四七二句の中の鳥の句は二十一句で四・四%である。複数出てくるのは鶺鴒六、燕三、雁(帰雁を含む)三、鶺鴒(冬の鶺鴒を含む)二だけで、あとは雲雀、郭公、千鳥、木菟などが一句となる。

われら越すつばめつぎつぎに海現れぬ 昭15

押黙る鴨と刻経しわれに気付く 昭16

雁のこる月の干潟にひびき消ゆ 昭19

電線に燕水平線遠し 〃

鳥の句の極めて少ないのは戦時中であり、勤労動員や戦災を受けたことによるものかも知れない。他には次のよう

な句が印象に残る。

雁帰る町に生徒とみやげ選る 昭15
 森落葉見つむる木菟の眼やあらむ 昭20
 句集『冬雁』になると、雁の句が五句（帰雁・冬雁各一を含む）で最も多く、郭公、雀、鶇が二句で、合計二十三句は全句数に対して七・七%である。

冬雁に水を打つたるごとき夜空 昭21
 シャツぬいで寝る夜帰雁のわたりけり 昭21
 戸隠の少年馬上閑古鳥 昭21
 ほととぎす一ト時雨せし笹徑 昭21
 郭公やいつも出てゐる田草取 昭21
 呼吸さはやか夏鶯に嗽ぐ 昭21
 焼跡にかりがねの空懸りけり 昭21
 この坂にいまわれのみや雁渡る 昭21
 棕鳥渡る山に焚火を消しをれば 昭21
 げんげんに顔うづめきく遠閑占 昭22
 雁や市電待つつにも人踟み 昭22
 などがすぐに思い出される。戦時中に鬱積させられた抒情が一気に燃え上がって結集したのでなかうかと思う。鳥の句からは離れるが、『冬雁』には次の句のごとく林火の代表句が多い。

こころひもじき月日の中に桐咲けり 昭21

とほるときこどものをりて薔薇の門 昭21

瓦礫に月虐げられしものばかり 昭21

虎落笛ひとふしはわが肺鳴れり 昭22

湯屋の前月濃くて冬去りにけり 昭22

ねむりても旅の花火の胸にひらく 昭22

人寰やかがやきそめし天の川 昭22

喜劇見て炎天のもの皆歪む 昭22

従来解説的な句の多かった林火がそれらを総てかなぐりすてて、物の核心に迫り、格調高い作品を作り続けたのである。昭和二十一年一月に贈写版印刷により会員約六十名で発足した「濱」が昭和二十二年暮には、投句者五百名を越す会員を得るようになった。しかも俳壇へ日迫秩父、野沢節子という二人の新人を送った。これらの新人の活躍に應えるべく林火も作句に真剣に取り組んだのである。

さて、次の句集『青水輪』に移る。

鳥も稀の冬の泉の青水輪 昭26

から句集名を得ている。この泉は弘明寺の裏山にあるが、あまり人が行く所ではない。林火もこの時初めて行ったのではなからうか。

蕭々と湖に鳴鳴くたたずめば 昭23

表②……林火作品/句集別「鳥」の句数

句集名	収録句数	春	夏	秋	冬	その他
海門	497	7	11	9	4	5
冬青集	254	2	2	9	3	2
早桃	472	5	1	3	11	1
冬雁	298	5	5	5	3	5
青水輪	425	3	3	3	3	6
白幡南町	577	9	2	8	4	17
雪華	587	10	7	2	12	13
潺湲集	432	10	1	1	14	16
飛花集	527	6	4	11	8	17
方円集	461	6	5	1	2	14
月魄集	563	14	5	6	4	11
総合計	5,093	77	46	58	68	107

鳥の句はこの句から始まる。『青水輪』には無季の鶏が四句あるが、これを含めても全部で十八句であり、全句数に対して鳥の句は四・二%と今までの中で一番少ない。

森に入るや筒鳥にまづみちびかれ 昭23

林火全句の中で筒鳥はこの句と昭和三十五年の「筒鳥鳴けり腕を撫しつづ歩むとき」の二句のみである。

雁ききしことの映画の案にをれど 昭23

葭切や蔵書のみなる教師の死 昭24

傘しづる雨につつまれ鴉聞けり 昭25

母の前子燕嘴あく一様に 昭25

炭火たちやすく鴨鳴く海辺なり 昭26

外套をゆるやかに着て鳩とをり 昭26

前句集の『冬雁』より切れも力も弱っているようである。この集の後半の時期は家を売って新しい家を建てるといふ雑事に追われている。また草津楽泉園通いが始まる。また静岡県通いが盛んになって来て、王子製紙富士工場の職場句会が賑わって来るのである。鳥の句ではないが、

啓蟄の大地月下となりしかな 昭23

往きに見し芦いなづまとなりたり 昭23

鶏頭を抜けばくるもの風と雪 昭23

花八つ手貧しさおなじなれば安し 昭23

夜焚火の火中の薪の透きにけり 昭23

などには前句集のいさぎよさが残っているようである。句集『白幡南町』になるとどうであろう。鳥の種類は二十以上に増えてくるが、複数は雉子と雁（寒雁一を含む）

が四句で、燕(燕の巢二句を含む)三、白鷺と椋鳥が二句の他はほとんどが一句である。無季の鶏と鴉の各四句などを合わせて合計四十句、全句数に対し六・九%である。

吊されて雉子は暖雨に緑なり 昭31
寒雁の翅に暮色は重からずや 昭32
冬日より夕日の鴉上田城 〃

渡り鳥微塵のごとしオホーツク 〃

第七句集『雪華』に入ると鳥を詠った句の種類が増える。ただし多く詠っている鴨が四句、郭公と木菟が二句で、二句は鶯(鶯子を含む)、雲雀、千鳥。この句集で初めて鴨が一句出てくる。無季の鳥を合わせて四十四句で、全句数に対して七・五%である。

貰ひたる鴨をしたたる雨傘 昭35
郭公の銜し合へりイエスの前 〃
夕笹子逼塞の友しきり恋し 昭36
アカゲラも来て雪晴の直ぐなる樹 昭37
百千鳥 柘の汝を運ぶ上 昭38
戻る鶴に寒暮むらさきより黒に 昭39
青葉木菟村に夜遊び靡れずに 昭40
これらの句に見るべきものがある。夕笹子の句の「逼塞の友」は、『濱』創刊当時非常に活躍した堂畑象氏であ

る。横浜高等工業学校の技官であって、独特な感覚を持つた方で大いに期待されたのであったが、汚職事件の嫌疑を受けて辞職し、俳句を作らなくなったと聞いている。郭公の句は清里における教会での作で、私もその後行ったが、そのような機会には恵まれなかった。百千鳥の句はその年の三月十八日に突然の咯血で窒息死した日迫秩父の出棺の際の感慨であるが、百千鳥が悲しみを救ってくれている。鶯の句は三浦半島の城ヶ島の鶯の崖での所見である。

『潺湲集』には、珍しく鴨の句が四句ままとまっている。

鴨群るるさみしき鴨をまた加へ 昭42
を含む印旛沼取材の句である。句集全体では鴨は五句となる。鶯が五句(鶯鳴二句を含む)の他は、鷹三句(季語でない一句を含む)、鴨、鴉、冬鶺鴒が二句となっている。

冬の日の出連山をまづ鷹がとぶ 昭42

この句集は鳥の句の割合が一番大きく九・七%となっているが、無季の雀や鶏、単に鳥とした句も多い。

『飛花集』に入ると花行脚が盛んになって来るに従って詠われている鳥のバリエーションも増えてくる。鴨(初鴨を含む)と鷹(季語でないものも含む)が四句。郭公、渡り鳥、雁が三句。雉子、雁、鴉が二句となっている。季語でない鳥を合わせて四十六句で、全句数に対して八・七%は

二番目に大きい割合である。目立つのは、

鷹行けり妻よともども存へねば 昭44
鳶鴉たたかふ下の畦を焼く 昭45
小鳥あまた卯月八日の山中は 昭46

句集『方円集』における鳥を詠った句は二十八句で六・一%に当たり、平均値よりも少ない。

汝が国に来て汝の亡し鳥渡る 昭52
の溝口青於の追悼句以外には際立った句は見当たらない。最後の句集『月魄集』の句集の鳥の句は四十句で七・一%であるので、他の句集との差異はあまりない。鳥の種類も従来とそう変動はないが、鳴く鳥が一句ある。

瑠璃鳴くや雨降つて朝みづいろに 昭52
前二句に「越後出湯」の地名があるので、瓢湖の奥の出湯温泉へ行き、新潟の「雪の会」の方々との吟行会で得た

表③……主な鳥

26	25	19	16	15	13	12	10	9	8	8	7	7	5	5	4	4
鴨	燕	雁	鶺鴒	鶯	郭公	閑古鳥	鳥	雲	行々	雀	千鳥	百	鳥	雀	鳥	雁
鳴	飛	鳴	鶯	渡	公	閑古鳥	鳥	雲	行々	雀	千鳥	百	鳥	雀	鳥	雁
鳴	飛	鳴	鶯	渡	公	閑古鳥	鳥	雲	行々	雀	千鳥	百	鳥	雀	鳥	雁
鳴	飛	鳴	鶯	渡	公	閑古鳥	鳥	雲	行々	雀	千鳥	百	鳥	雀	鳥	雁

句であろうか。前に筒鳥が出たのが珍しいと書いたが、筒鳥は「ポツポツ」と空筒を打つように鳴くのでまだ聞きわけやすい。大瑠璃になると相当の体験者でないとなかなか聞きわけられるものではない。

刈込の枯山水に初音かな 昭54

よいところで初音を聞いたものだと感じている。場所は小堀遠州の造園で有名な滋賀県水口町の大池寺である。

今生と思へぬ声に雁渡る 昭55

志摩半島の安楽岬で安楽文楽を見たあとに生まれた句である。雁渡る声をあの世と感じたのも死期の近さを思わせるに十分である。

明暗の波の綺羅また鴨の数 昭56

行く雁の曇り深めて消えしかな 昭57

このような句が出て来ると何とも言いようがなくなってしまう。

表③に林火作品に多く出てくる鳥を一覧にしてみた。鴨の中には春の鴨や初鴨も含まれる。燕には燕の子も入れた。おおむねそのような表であると思ってもらいたい。雀の四句は季語の寒雀と初雀だけを数えた。季語でない雀は他に十三句ある。また単に鳥としている句も十九句にのぼる。

林火は小鳥の声を聞くための旅は一切していない。囀る小鳥は「探鳥会」にでも行かなければ詠えないもので、林火は林中を長歩きすることが嫌いであつたので、このような数字になつたのだと思われる。鳥の句が決して多くないにも関わらず記憶に残る佳句があるのはなぜであらうか。それは林火の抒情性と鳥という生き物が深く結び付いた結果であると思つているのだが、その検討は後進に委ねることにしたい。

(3) 林火における老いと死の句

林火はつねづね私などに「五十代になつたら五十代の句を、六十代になつたらなるほど六十代の作だと思わせる句を作れ」と言つていた。林火自身もまた年齢について執拗と思えるほど詠いつづけている。

- 冬あたたか五十のわれに母在れば 50歳
 - 還暦の近しや月夜葉が落つる 58歳
 - 六十に何の慕情ぞ十六夜 59歳
 - 父母迎ふ火に照らされて六十三 63歳
 - 満齢古稀さくらのもとにけふ一日 70歳
- 欄あたたか父母よわたくしも七十です ”

- ちちははの齡越えて日々短しや 74歳
- 屠蘇ふふみ喜寿うべなうてばかりかな 76歳
- 誕生日七十七たび芽出し雨 ”
- 不勝簪杜甫より老いて柿喰る 78歳

このように並べてみると、自らの年齢を詠う時に多くの場合で父母を詠っている。なぜそうなつたかを考えてみると、父母に甘えきつて育つたので、父母の死後も甘えがこのような形となつて表出されたのではないかと思う。私の若い頃、林火は「私はよく母から、『お前は体が弱いので二十歳まで生きられればよいのだとお医者さんが言つていゝ』と聞かされた。そのため私が欲しいと言えども買つてもらつて甘やかされて育てられたんだ」とよく話していた。自らの加齢と父母への思慕が林火の中では一体のものであつたのかも知れない。

「五十代になつたら五十代の句を、六十代になつたら六十代の句を」というが、一人の作家の作品で、五十代の作品と六十代の作品に区別を付けて論ずるのは至難の技であると思う。たとえば四十九歳の作の「手毬唄きこゆ生涯の家と思ふ」の句と七十五歳の時の「この世よりあの世思ほゆ手毬唄」の二句を比較すれば、前句には大きな希望があるが、後句には希望はなく諦観だけである。四十代の作と七

十代の作には歴然たる違いがあるが、五十代の老いと六十代の老いは、七十代以後になつてなるほどと解るのである。また老いに対する作家ごとの考え方の差異もあらうと思う。五十代、六十代、七十代、八十代それぞれの句を作るといふのはなほ難題なのである。

いづれにしても、現代の俳人で林火ほど多くの老いと死について詠つた人はいない。以下、林火の作品の中で「老い」と「死」をテーマとした句を拾い上げて概観してみたいと思う。

①『青水輪』の時代

(昭和二十三年〜二十七年、四十四歳〜四十八歳)

舟のめぐり海月群れきて死の翳す 昭23補
 四十路にして神にひれ伏す秋の暮 昭24補
 白息の中に書く文遺書めきて 昭25補

さすがに三十代以前の『海門』『冬青集』『早桃』『冬雁』にはないが、四十代半ばになると死や年齢をテーマとした句が出てくる。しかしこれらの句は句集には採録していない。年代の下に記した「補」は句集未収録の作品という意味である(『大野林火全集・第二巻』参照)。

②『白幡南町』の時代

(昭和二十七年〜三十三年、四十八歳〜五十四歳)

蚊の声す明日肯はんには老いぬ 昭27補
 手毬唄きこゆ生涯の家と思ふ 昭28補
 生くことのいま在ることの椎匂ふ ” 補
 夕端居父の齡にちかづきつ ” 補
 悴みて教師より職知らぬかな 昭29補
 冬あたたか五十のわれに母在れば ” ”
 夏果や眼にありありとわが臥す日 ” ”
 余生じみて白梅のもとと咳落す 昭33補

四十八歳で「蚊の声す」の句が発表された時、目黒秩父が林火に「先生の作品の中に老いを詠つた句が出て来たのはさびしい」と言つて来たそうである。句集に採録していないのは秩父の言のせいではなからうか。少年期に体の弱かつた林火は人生五十と考へており、四十八歳ともなれば「明日肯はんには老いぬ」は当然なのかも知れない。また昭和二十七年当時の日本人の男性の平均寿命は六十歳を少し超えたくらいでなかつたかと思う。そうなれば四十八歳では早すぎるとはいえないのである。「手毬唄」は白幡南町に生涯の居宅を構へた時の感慨である。「夕端居」は四十九歳の時の作で、父正松の享年の六十四にはまだあと十

五年ある。この句を含めて、老いを思わせる句はまだ句集から外そうとしているように見える。

話は変わるが、昭和二十七年に白幡南町に新築した家にクレゾールの臭いが立ちこめる日がよくあった。栗泉園からの句稿が着いた時であった。前年から林火は草津栗泉園の指導を始めていた。四、五年後にはクレゾールの臭いが立つことがなくなった。消毒する必要がなくなったのである。新薬プロミンは肺結核のために開発された薬であったが、らい菌の撲滅に効果をあらわした。林火はらい菌の潜伏期間が三十年と知っていたので、四十七歳で感染しても死ぬまでは発病しないであろう思つて指導を引き受けたふしがある。ここにも林火の寿命と死への考え方を知る手掛かりがあるのではなからうか。

③「雪華」の時代

(昭和三十三年〜四十年、五十四歳〜六十一歳)

死てふ語と香水の香の行きずりに 昭34
 心老うる日枯木の雀大使とす 昭34
 わが死後のごと一燈に妻子凍む 昭36
 晩涼をよるこびあひて夫婦老ゆ 昭36
 皆晩年冬日黄なるに撮られけり 昭36

炎天に怒りおさへてまた老うも 昭38
 還暦の近しや月夜葉が落つる 昭38
 六十に何の慕情ぞ十六夜 昭38
 人の行く方へゆくなり秋の暮 昭39
 灰に火を埋め死よりも老が見ゆ 昭39
 大寒や酔ふてますます老残に 昭39
 鯖漁る火命惜しめと沖に殖ゆ 昭39
 老いゆくを知れとて長き夜はあるか 昭39
 期すものに老後も初心水澄めり 昭39
 五十代後半から六十代になろうとする時代の「雪華」には老いや死をテーマにした句が次第に増えてくる。「わが死後のごと」は比喩であるが、死後のことを見事に詠い上げている。「鯖漁る火」は甲斐虎童氏の招待で行つた房州太海で作つてゐるが、「期すものに」の句とともに多くの称讃を得ている作品である。

④「潺湲集」の時代

(昭和四十年〜四十三年、六十一歳〜六十四歳)

籠るなり老斑をまたふやす冬 昭40
 息白く長くわが生確かむかな 昭41
 わが家さへ逃れたとききりぎりす 昭41

⑤「飛花集」の時代

夕蟬の長鳴き余命量らすや 昭42
 夏の果死に仕度またわが事よ 昭42
 年いよよ水のごとくに迎ふかな 昭42
 囀りを臥して余生のごとく聞く 昭42
 父母迎ふ火に照らされて六十三 昭42
 眉に白きを交へて夜を秋といふ 昭42
 夜長し死者と交はる夜もありて 昭42
 鴨群るるさみしき鴨をまた加へ 昭42
 日向ぼこ死が近く見え遠く遣り 昭42
 厚落葉踏む父母よりも師の恩に 昭42
 冬籠れば余生飽きしを嘆きに來 昭42
 冬の日の出赤失へばすでに老ゆ 昭42
 雪が皆隔つ老ゆまじく老ゆまじく 昭43
 暮歩くさみしきときはさみしと言へ 昭43
 旅のあと昼寝に生を養へり 昭43

「年いよよ」は総合誌「俳句」の新年詠に出すために自宅で作つたものである。昭和三十三年に「余生じみて」と比喩で詠っているが、『潺湲集』になつて木格的に「余生」と詠いはじている。また「老斑をまた」「眉に白きを」と老いが具体的に描写されるようになってゐる。

(昭和四十三年〜四十八年、六十四歳〜六十九歳)

晩年や籠りて雪の日もまじり 昭44
 鷹行けり妻よともども存へねば 昭44
 萩を焚き明日待む齢もう過ぎし 昭45
 大寒や生きゆくかぎりいさかひも 昭45
 寒椿けふもの書けて命延ぶ 昭45
 骨の音させて溽暑の立居なる 昭45
 老いらくのはるばる流し難に逢ふ 昭46
 背ナ寒し汝に十年生き延びて 昭46
 水餅の壘出てわれの代も古りし 昭47
 しぐれのあとしぐれのあとと峠越す 昭47
 薄墨に散りてこの世のさくらならず 昭48
 へんろ宿あの世の父母の宿のごと 昭48
 麩や妻をこよなき友として 昭48
 このごろを嘆きの汗のほか知らず 昭48
 白鳥と老卒業生水に澄み 昭48
 鳥渡り了ふ森川町はなくなれり 昭48

「鷹行けり」は静岡県清水で作つてゐる。「老いらくの」は和歌山県加太の灘流しである。昭和四十六年からは各地に出掛けて年々桜を詠つてはいるが、直接老いを詠つては

いなくとも老境のさびしさがどの句にも宿っているようである。

◎「方田集」の時代

(昭和四十八年〜五十二年、六十九歳〜七十四歳)

亜浪忌の馬齢のみ師に近づくと 昭48
 如何な世になるや老いきてこの寒さ 昭49補
 火を埋む人押し生きたりき 〃
 満齢古稀さくらのもとにけふ一日 〃
 燭あたたか父母よわたくしも七十です 〃
 飛花もろとも消なば消えてもよき齡 〃
 桜濃し死のごと曇る沢内村 〃
 久幽の生き死二語り春逝かす 〃 補
 端居また老を肯ふばかりなり 〃 補
 寒といふ言葉を怖れ約束せず 昭50
 晩年の一日の夏至の雨に籠る 〃
 西日歩き余り者にも似たるかな 〃
 明易の古稀さへもはや二年過ぎ 昭51補
 青露の死後おもふわれ妻知らず 〃
 衰へは閑名月ただ眠る 〃
 死ねば落葉被し山椒魚に似るか 〃

年忘れ花火野郎も老いにけり 〃
 咳訴へ老人ですからと云はれ帰る 昭52
 衰への旅も三日の薄暑光 〃
 梅雨寒の根なくなれば終りかな 〃
 梅雨を聞くために余生はあるならむ 〃
 秋拾晩年いよよ縷のごとし 〃
 寄鍋や先の知れたる者二人 〃 補
 みづからを憐れみ足袋のままに寝る 昭53
 亡き友を語るつどひに年逝かす 〃 補
 年守り僧老いよよねがふなり 〃 補
 いのち延ぶ万燈籠に火を加へ 〃
 春愁の旅に出て身を投げ打たんか 〃
 ちちははの齡越えて日々短しや 〃
 白田亜浪の享年は七十二歳である。「馬齢のみ師に近づくと」と詠った時林火は六十九歳であった。「桜濃し」の句には沢内村の状況が描かれているとともに、山崎和貫流の死にもつながって来る。昭和五十年には「初花のまだ朝日子に紛るるほど」「落花舞ひあがり花神の立つごとし」など桜の句が多くなるが、花の明るさと美しさを詠うのではなくて、自己の気持ちを託しているので絢爛たる花の明るさは出ていない。何か重い物を体の中に蔵している感じで

もある。「咳訴へ」は癌による咳と思われる。昼間我々の前で咳き込むことはないので、就寝して体があたたまると出る咳である。この頃になると毎月杉本寛氏の自宅の「杉の実」句会で、私たちと夕食を摂るのであるが、「肉を食うと何か食道にからまるようであまく胃に納まらないようだ」と言っていた。咳の出るのは気管であり食道とは関係がないので、医学知識のない我々には少々理解出来なかったが、もう既に食道のリンパ腺が癌細胞に侵されていたのでなかつたらうか。亡くなる年に「菜種梅雨鉛のごとき胃を抱くも」と詠っているが、胃の噴門に鉛のような突起物が二本も生えたのはすでにこの頃であったのだろう。この句集では「火を埋む」「満齢古稀」「飛花もろとも」など明るさというよりも暗さを負った句が多くなって来る。

◎「月魄集」の時代

(昭和五十四年〜五十七年、七十五歳〜七十八歳)

しぐれ恋ふ死を急ぐごと旅つづけ 昭54
 しぐれして余生の永き世はよきか 〃
 老林火咳止め飴を離さず 〃
 この世よりあの世思ほゆ手毬唄 〃
 咳終へて遙かな国に來し思ひ 〃

いのち長きより全きをねがふ寒 〃
 息杖となすさびしさの春疾風 〃
 年毎に死に近づきてさくら見る 〃
 老いしことありありと着る白緋 〃
 古人多く旅に死す蝸の鳴き綴る 〃
 鱗雲肅々と延ぶいのちかな 〃
 みほとけの一隅貫ひ月に座す 〃
 「しぐれ恋ふ」の句でしぐれの旅は死を急ぐ旅だという。「古人多く旅に死す」を願っていたのであろう。「咳終へて」はこれも癌による咳であろうが、「遙かな国に來し思ひ」には何か悲痛なものを感じる。「年毎に死に近づきて」と詠っているが、林火と桜は一体となっているのである。生涯の五千余句の中で花の句は百二十句余りであり、しかもそれが『飛花集』『方田集』『月魄集』にその大半があることを思えば、老いの華やぎを求めたといつて過言ではない。以下は句を並べるとどめる。

屠蘇ふふみ喜寿うべなうてばかりかな 昭55
 喜寿傘寿ともども年を忘れけり 〃
 竹の秋一日臥して生つなぐ 〃
 人の死に重ね花冷中すなり 〃
 命ありて立つ長城の薫風に 〃

幸子、幼時をわが家にわれとあたかも兄妹のごとく育てられしことあれば、あれこれ、なつかしき募り、強ひてわが家に連れ来る。老母喜ぶこと云はん方なし」の長い前書を付けて、「春寒し泣けば現はる幼な顔」と詠っている。昭和二十九年の作品である。

林火先生が旧制中学校へ入学し、旧制第四高等学校から東大を卒業するまでは父君の仕事も順調なようであった。林火が白田垂浪を師として俳句の道に入った後に、親として子供が厄介になっている師へ挨拶すべきであると言つて代々木山谷の白田垂浪を訪問されたということも聞いている。義理堅い父親であつたようである。ただし六年間の病臥の末に昭和十一年に亡くなつてしまふ。母堂が縫い仕事で二人の生活を支えたとちらりと聞いている。

合歡老いぬ父この海に吾を抱きし

昭25

旧制県立第一中学校でのちに俳文学者となつた荻野清さんと同級になつたことは、林火の人間形成に大いに寄与したようである。荻野さんが通学の道筋に住んでおられたので仲良くなり、二人で学校を休んで東京の浅草へ出て、女義太夫などを聞いたりした。芝居にも通つて四年の時は出席日数不足で二人とも落第している。そして二人の親が学

校に呼ばれて注意をされた。そこで荻野さんの父が旧派の俳句を作られていたので、家庭句会をやることによつて休校をしないように勧めたのであるという。林火の俳句の温床は家庭俳句からであつた。横浜は開放的な土地であつたので、荻野さんと町を歩いてきた時にたまたま「加比丹」句会の看板を見て参加した。前田普羅氏の選を受けた句が、

焚火踏まえ袖夕闇に消え去んぬ

であり、「加比丹」誌に活字になつた最初の句であるという。この翌年（大正十年）に荻野さんのすすめで「石楠」に入会している。後年、この句の「焚」を二つの字にして「林火」の号が生まれた。もちろん白田垂浪による命名である。

白山 風舌が夕日に流れくる

この句は大正十一年毎日新聞社で行われた観光俳句募集に応募し、白田垂浪選の特賞を受け三十円の賞金を得たものである。同級生全員を料理屋で接待して十円を使い、あとの二十円は「石楠」の資金募集に充じている。その当時の大幹部金子麒麟草の応募は十円である。前年の大正十年六月に「石楠」へ入会したばかりの新入会員であつた。

これは後年の話であるが、ある日原田種茅さんに「鉄ち

やんの同級生に中村忠という人がいるだろう」と言われた。中村君は旧制横浜商業専門学校の俳句の会「若鮎会」に入つていたことがある。私が「中村君は、かつて上野の駅前の旅館をしていた井筒屋の息子です」と言つたら、「その井筒屋へ林火ちゃんも駆け落ちしたのだよ」という。私は驚いてしまった。

林火は大正十三年に東大経済学部に入學したが、冬は通學が大変であるとして、十二月から二月までの三カ月を本郷森川町の下宿屋から通學したことがある。代々木の「石楠社」へ通うのも便利であつた。日本橋十軒店で郵便局を経営していた原田種茅さんの店へは三日にあげずに通つて、世間一般の常識、鮎の食い方味わい方、蕎麦の食い方などいろいろなマナーを教わつたようである。「石楠」の先輩で軍医であつた杉田以上さんもその下宿にいたそうで、その謹厳な処世振りを下宿の女将から聞かされたものだと言つておられた。その女将の姪が下宿の手伝いに通つていた。上野千駄木で生花用の籠などを作って商つていた家の娘である。桂歌子さんといつて実践女学校の卒業生で、校長であつた下田歌子さんの秘書などを暫くやつておられたと聞いている。明るい開放的な性格であるという。

霜夜米し髪のしめりの愛しけれ

大15

はこの歌子さんを詠つたものではなからうか。三年生の時に恋に陥つて両親の許可が得られないため駆け落ちを敢行したのである。その駆け落ち先が上野駅前の旅館「井筒屋」であつた。種茅さんは「林火ちゃん」の親の代理は私がつとめ、歌ちゃんの親の代理は叔父さんだつた。そこでまだ在学中であるから、卒業したら結婚させるという条件で解決したんだ」と言つていた。たまたま井筒屋の息子が私の同級生であつたので話をしてくれたのかも知れない。この話は「石楠」の東京在住同人の間では周知の事実であつたという。林火は「石楠」の古い作家を「濱」へ入会させなかつたが、その一つの理由に「濱」の若い会員にこの恋愛のことが知れわたるのを嫌つたという話もある。

昭和二年三月に東大を卒業し、不景気のどん底で就職もままならなかつたが、灯台のレンズを造つている日本光機工業(株)に就職した。総務課社長室勤務であつた。「社長や常務の得意先招待の宴席には必ず同席したが、なかなか辛かつた」「何よりもいやなことは、母の知り合いの常務の愛人に月々の手当を持つて行くのも役目で、それをやるのが一番嫌だつた」と先生は言つておられた。私は林火年譜に「母の友人の關係で」日本光機に就職したと書いたが、

思い合わせればこの母の友人が常務の愛人だったのかも知れない。

この年の七月に長女涼子が生まれ、翌八月に桂歌子と結婚している。昭和三年三月涼子死亡。

むつきのいのちなりきれんげう咲きそるふ

昭和四年長男正己誕生。昭和五年県立商工実習学校の教諭となる。商工実習学校は旧制中学校で林火は商業事情を担当した。昭和六年の八月に次女玲子誕生、それと入れ替わるように正己が流行性脳膜炎（日本脳炎）に感染し、歌子夫人の看護を受けるようになった。日本脳炎は高熱、昏睡、筋肉硬直などにおそわれるので、母親にとつては子の苦しみを見るに堪えないのである。当時住んでいた蒔田町の家は硝子戸の多い家だったが、硝子戸はすべて黒い遮蔽幕が張られていたという。家で体を休めることが出来なかつたので、帰るのが辛かつたと述懐していた。そして帰れば歌子夫人から「貴方は学校へ行っている間正己の苦しみを見ないですむから良いでしょうが、私は一日中付き合つていなければならぬのですから」と責められる。いる場所が他にあればとしばしば思ったそうである。その年の十二月に正己を送り、年明けて一月に二次感染した夫人を送っている。その年の妻子の新盆の句が次の作である。

燈籠にしばらくのこる句ひかな 昭7

ここで少々付け加えると、菩提寺である増徳院の過去帳には歌子夫人、長女涼子、長男正己の三人がともに載っていないという。三人の遺骨は市営墓地の大野家先祖代々の墓に入っていないのである。昭和四十九年十一月秋の叙勲の時に戸籍を提出したのであったが、これにも三名は記載されていないかつた。つまり歌子夫人とは正式な結婚をされていないということである。歌子さんとの平穏な生活は四年足らずであつた。林火が登志子夫人と再婚したのは昭和八年十二月のことである。

②教師林火

雁帰る町に生徒とみやげ還る 昭15

前書に「奈良」とある。林火は商業実習学校の生徒の関西旅行（卒業旅行）には監督のために何度か付き添つて行った。近藤一鴻氏も四年生の時の担任であつたので、共に行ったのである。京都へ泊まつたときに、先生たちが二、三人で少々息抜きをしようという段になり、宿から相当離れた場所へ行つて、ここなら生徒が来ないだろうと店に入つた。そこにクラスの級長であつた一鴻氏らが四、五人でビールを飲んでいて。生徒の方でも、この辺りなら先生が

来ることもないと考えたことだったのであろう。林火先生は「双方大慌てでそこを立ち去つたんだよ」とよく話しておられた。卒業旅行の開放感があつたのであろうが、なかなかしたたかな生徒である。しかし一方で、「罪を犯せし生徒と対す」の前書で次のような句もある。

懺悔の涙ぼつんと冬木ともるとき 昭13

戦後のある日の、小峰喜代一君と粟飯原孝臣君の話を再現してみよう。

喜「そのことチャンに話してあるのか」

孝「いやまだチャンに話していない」

喜「それは不味いよ。そういう話はチャンにことわつておかないと、後で面倒になるよ」

孝「じゃあ、明日行つてチャンに話して、了解を得ておこう……」

話の中の「チャン」は林火を指している。教諭時代の綽名である。これについて宮津昭彦君にその由来を聞いたが、知らないと言う。しかし、私には思いあたることがある。

後でも書くが、昭和十五年の春、先生と同行して臼田曲浪居を初めて訪れた。その時亜浪夫人のステさんに「林火ちゃんのお弟子さんはこちらへ上がつて下さい」と部屋へ

案内されてお茶をいただいたのであつた。「林火ちゃんのお弟子」という言葉が特に印象的だつた。そのあとで新年句会へ行つたのだが、和服姿の品のよい紳士が「林火ちゃんのお弟子さん、どうぞこちらへ」と会場の木席の方へ案内された。原田種茅さんだと後で知つた。種茅さんとは戦後もしばしばお会いして、珈琲を飲んでお話をした。「林火ちゃん元気？」と常に言つておられた。「石楠」の東京の幹部の間では「大野さん」よりも「林火ちゃん」で通つていたのでないかと思う。

誰が最初にそう呼び始めたのかというと、亜浪夫人ではなかつたらうか。林火は「年齢に親子ほど差があり、亜浪夫妻に子のなかつたこともあり、奥様ともどもわが子のようにいたわつて下さつた思い出だけが残っている」と書いている。亜浪夫人が「林火ちゃん」と呼びはじめ、「石楠社」へ出入りする人々も親しみを込めて「林火ちゃん」と呼ぶようになったのであろう。林火の一番弟子で学校の教子であつた佐野俊夫さんや近藤一鴻さんも、私が呼ばれたように「林火ちゃんのお弟子」と呼ばれたのであろう。そこから「林火」を省略した「チャン」が学校での綽名となつたものと思われる。

林火が教師となつて住んだ家は学校の近くで通学路にあつたので、放課後生徒がよく寄つて自習をしていたようである。歌子夫人は賑やかなことが好きだったのでそれを許していたという。林火は時に「放課後私の家へ来て自習をしていた生徒は、おおかた上級学校の試験に合格して進学していった」と言っていた。林火の家が補習塾の役目を行っていたのである。

横浜高等工業学校や商工実習学校には「石楠」の会員も多かつたので、林火宅が句会の会場になつたようである。近藤・鴻、佐野俊夫、水町秋二、小泉風子らは林火の担任の生徒ではなかつたが、林火担当の「商業事情」の講義をなくすために俳句の話をしてもらいたいと申し出て、その話を聞いてもらううちに林火の弟子一号となつて句会に参加するようになった。林火宅では「石楠」の句会ばかりでなく、放課後に集まつては生徒たちが句会を催したようである。句会をやると夜に入るので、歌子夫人は生徒から出前の注文を聞いて、ラーメンや蕎麦や井物を取つて食べさせていたそうである。林火としては大変な負担であつたらう。

③ 江比間

林火は昭和十六年に三省堂から『現代の秀句』を出版し

て多額の印税を得た。そこで妻子を連れて愛知県渥美半島の江比間の海水亭へ行き、一週間の長逗留をして夏を楽しんでいる。句集『早桃』にある「江比間（一）」がその時の作品である。

夜光虫ふなばた冷えてきたりけり 昭17
店越しに紺青の海梨を買ふ 〃
夏雲やこの部落白軒とはなからむ 〃
夜光虫岩を蝕ばむごとく燃ゆ 〃

また、昭和十八年にも江比間へ親子三人で出掛けているが、これは再版による印税の収入によつてである。これが「江比間（二）」となつた。

落潮の迅さ夕焼濃かりけり 昭18
こくこくと牛乳飲む朝を雲灼くる 〃
藪車ゆらと緑蔭を引いて出づ 〃
海盤車赤しこどもらは昼寝の刻か 〃

前後二回の江比間での作品には一つの仕事をなしとげた開放感が溢れている。よきパパぶりを詠っているのも昭和十五年から十七年に集中している。

オーバーのまま風邪の子の熱うかがふ 昭17
炭火映ゆ子の掌妻の掌風邪ひくなよ 〃
『現代の秀句』はよく売れて、印税はその当時の金額で三

④ 白田亜浪

昭和十五年、「石楠」の新年句会に参加する機会があつた。林火先生に連れられ、奥村童舎、青山静夫と私の三人が同行したのであつた。先生が「石楠書屋」に寄つてから行こうということなので、中野区西町へ向かつた。玄関の横の羽目に中村不折書の「石楠書屋」の板の額が掲げられていたことをはつきり覚えていた。玄関へ入ると先生はすぐ上がつて亜浪先生のおられる奥の間へと行かれた。我々三人は玄関に突つ立つていた。この時に亜浪夫人に「林火ちゃんのお弟子さんはこちらへ」と言われたのである。「林火ちゃんのお弟子」という言葉が印象的だったのは、我々は白田亜浪の弟子ではなく、林火を通じて亜浪に結び付いているのだ、いわゆる孫弟子なのだと想つたからである。

亜浪先生はその前年に軽い脳出血をされて療養中であり、面会を制限されていたので、我々はお目見えが出来なかつた。そしてまた亜浪先生は新年句会へも出席されなかつたので、戦前の亜浪先生の顔は知らない。

私が昭和二十二年にシベリアから復員して「石楠書屋」へ挨拶に伺つたのは五月の十日頃であつた。昭和十五年に伺つた時に入れなかつた奥座敷で亜浪先生にお会いして帰

百円くらいであつたという。昭和十五年に大学卒で会社へ就職すると月給が八十円であつたので、親子三人で十口間くらいの長逗留は出来た。江比間の海水亭は「石楠」の同人川合華光氏が経営していたので、多くの俳人が投宿していた。沢山の有名俳人の短冊色紙を保存していた。また江比間には「石楠」の若手の有望な俳人の鈴木鶴子がいて交友を深めていた。

戦後、林火が昭和四十三年に明治書院から出した『近代俳句の鑑賞と批評』は、『現代の秀句』の改訂版ともいえるものであるが、昭和十六年頃の俳句関係の出版状況と比較すれば読者層は全く違つていた。昭和十六年にはそのような総合鑑賞本は全くなかつたので、早天の慈雨のごとく読者によるこぼれて版を重ねたのである。また昭和四十八年に『増補改訂・近代俳句の鑑賞と批評』を再び明治書院で出版しているが、売れ行きは芳しくなく、明治書院は俳句関係の出版から手を引いている。最近同社で名句集全集を企画しているようだが、現代の俳人はそのような本は求めていない。現在の俳句人口の構成は女性が主体で、文学としての俳句を求めているのではなく、趣味として教養としての俳句を求めているのである。ついでのことなので書いておく。

還の報告をしたところ、林火先生のことや「濱」のことは一切言わずに、「お前、シベリアで鉄に会わなかったか」と聞かれた。「鉄」が岡田鉄であることはすぐ解った。私より一年早く出征していて、顔は知らなかったが、「来し鉄路わかれ武威野枯れ深き」という句を覚えていた。そこで私は「先生、シベリアは広大な所であり、収容所間の交流は出来ないのでは会いようがありません」とお答えした。亜浪先生は「鉄は可愛い男だよ。シベリアからの便りが身内には来ないで、俺の所へだけ来たんだよ。そこで俺は身内を呼んでその手紙を見せてやったのだよ」と自慢げに言っていて笑っておられた。好々爺のお百姓さんを感じた。この人が「俳句道即人間道」を説いた人とは思えなかった。

林火に次の句がある。六十三歳の時の句である。

厚落葉踏む父母よりも師の恩に 昭42

戦後「濱」を創刊するに亜浪の了解を得たかどうか、はなはだ疑問である。創刊号に発表された亜浪の作品五句のうち三句は『白田亜浪全句集』に載っているが、二句は見当たらない。

林火先生は法泉寺で行われた亜浪忌には必ず参加して挨拶を述べられたが、亜浪旧宅の中野区西町で行われていた

亜浪忌の集いにはあまり参加していなかったようである。一度中野のサンプラザで何かの会があった時に亜浪忌と重なったので、昼間のうちに私と共に挨拶に参上したことがあった。

亜浪忌のうすら寒さの霧巻く木 昭50

亜浪忌の不参みちのくより詫びる 昭54

亜浪忌の寄書の名も減りにけり 昭55

ほそぼそとつづく亜浪忌守りけり 〃

昭和五十六年は第二回訪中団で中国へ旅行中であつた。

林火先生は亜浪先生の「まこと」と俳句道即人間道に反撥しつつも亜浪を慕っていた。「厚落葉」は亜浪夫妻の林火に対する愛情への感謝の句であると言つて差し支えなからう。ただし、亜浪の作品を読み返した林火は、「昭和十五年三月末、第一回目の脳溢血に冒された時の作『榎植咲く』と見て眠りたり響れてをり」などで先生の俳句は終わっているのではないか」と言っていた。その原因は発病、敗戦、夫人の逝去によるものだと語つた。

⑤白幡南町

手毬唄きこゆ生涯の家と思ふ 昭28

林火は横浜市内を転々と居住したが、昭和二十七年の秋

に弘明寺の家を売つて白幡南町に新築し、これが終生の家となつた。

日に夜に母泣かす母の咳憎む 昭26

入日の冷え家のそここ母の咳 〃

母咳きて風吹く夜は冬に似る 〃

母の咳道にても聞え悲します 〃

句集「青水輪」に「母の咳」の題で四句が載っているが、母をゆつくり休ます一部屋が欲しいために思い切つて新築したのであつた。母堂へ最後の孝行をなされたような気がする。

この家は東神奈川駅の北口から歩いて浦島山の権兵衛坂を越えねばならない。二十分ほど歩く必要があり、足の弱い先生にはよい運動量だと喜んでいたが、一カ月もしないうちに少し坂の急な所で躓いて歯を折つたりなどした。それから歩きのを止めて往復クルマ利用ということになつてしまつた。

新築した家の建築費用は九十万円かかつたそうである。

弘明寺の家の土地建物を売つた金額は三十五万円であつたので、五十五万円は不足であつた。不足分は佐野俊夫氏が立て替えた。つまり佐野俊夫氏に五十五万円の借金を負つたわけである。この年の十一月に、依頼されて角川書店の

「俳句」の編集を引き受け、三年後の昭和三十一年十月に西東三鬼に引き継いだ。「俳句」の編集により得た収入で、新築するための借金は返済し終えている。

先生はその自祝を兼ねて、その間「濱」の編集を担当した私の労苦と、会計を担当していた田中灯京さんの骨折りを慰勞する意味で、夫人の手料理で一席の宴を催して下さつた。今考えれば過去にはもちろんなかつたし、その後もなかつた唯一の水入らずの宴席だつた。始める段になつて一杯の酒もないのでは様にならないので、夫人に一本つけてもらつたが、三人とも下戸である。盃で一、二杯飲めば足りてしまう。どこかで蛙の音がしていた。突出し、酔の物、焼き魚、和え物、すまし汁など一通り会席料理に適つていた。その時の様子が次の作品となつた。

一合の酒剩しきく初蛙 昭22

先生の亡くなられた後に先生の家の台所を覗いたことがあつたが、現在流行のキッチンには及びもつかない質素なものであつた。途端に手料理をいただいたことを思い出したが、あれは仕出し屋から取つたものだったのだと納得したのである。

白幡南町の土地は当初借地であつたが、十年ほどたつて所有者が相続税のため売るといふことになり、六十坪で二

百万円だというので買うことをすすめた。先生もそのくらい金はすぐ用意出来たのであった。生涯の土地持ちとなつたわけである。昭和三十七年頃のことである。

⑥ 楽泉園高原俳句会

群馬県草津にある楽泉園の高原俳句会は、それまでの指導者本田一杉氏を亡くし、後任を求めていた。林火の第四句集『冬雁』を読んだ村越化石氏はその抒情性の豊かさに感激し、躊躇することなく林火を指導者として選んで昭和二十五年に依頼状をよこした。その翌年から林火の楽泉園行きが始まるのである。昭和三十一年には「雪の癩園」と題して力作を発表している。

昏くおどろや雪は何尺積めば足る 昭31

雪の扉や癩に無惨の留置場 〃

雀色時雪は光輪持ちちて降る 〃

落葉松は雪をとどめずさらさら鳴る 〃

雪の水車ごととんことりもう止むか 〃

林火は楽泉園に通うことで雪をじつくり詠い得た。と同時に村越化石という俳人を育て上げ、世に出した。

除夜の湯に肌触れあへり生くるべし 化石

の句は衝撃的であった。ハンセン病者もプロミンによつ

て生きられるという望みの発露でもあった。その後の村越化石の句業は多くの人々に感激を与えているが、林火あつての化石とでもいふべきであろう。

「雪の癩園」の前書には「句集『火山翳』出版記念のため近藤書店主ともども草津楽泉園へ行く」とある。合同句集『火山翳』は栗生楽泉園俳句会のアンソロジーで、園内の生活の様子を全国に知らしめると同時に俳壇に大きな反響を呼んだ。

喉管を白き狐が夜々覆ふ 浅香 甲陽

喉管に泡立ち荒き風邪葉 白井春星子

呼吸困難な症状の時には気管に開けた喉管から呼吸をする。顎から白布を吊るしてその喉管を覆うが、それを「白

き狐」と呼ぶのである。

点字読む指を炬燵にほぐしては 佐藤 母杖

春逝くや舌もてひたに読む聖書 山本よ志朗

仏生会病み古り癩者指紋なし 高橋 夢一

麦秋や妻子を生かす癩の銭 村越 化石

ユダの不信吾にもありや麦を踏む 後藤 一朗

細雪ある日訣れしままとなれり 金子 晃典

生きぬるが孝かも母ゆ柿送らる 白井 米子

などの句が林火の後記に載っている。

『火山翳』の出句者は四十四人であるが、亡くなられた十三人も含まれていた。昭和三十一年十二月発刊時の生存者は三十一名であった。現在も健在なのは村越化石、白井米子両氏のみである。三十一名の中で八名がその後句集を出されている。化石氏の句集序文は林火が書いた。金子晃典、白井春星子、後藤一朗、上山茂子、白井米子、後藤房枝、佐藤母杖の七氏の序文は私が書いている(『濱俳句の系譜』に収録)。

林火は『火山翳』の後記の最後に「私はこの軽井沢在小瀬温泉で編んだ」と書いている。温泉宿は安住敦氏に紹介してもらっている。同宿していた安住氏によれば、食事時だけは一緒に話したが、選句など自分の仕事だけに没頭していたという。「選が終わったら、林火さんは『私はこれから楽泉園へいく』とすたすた去ってしまつて、自分は何のために小瀬温泉へ行ったのかさっぱり分からなかつた」と安住氏は述懐しておられた。

⑦ 林火との旅

昭和二十二年に復員して、休職先の東芝へ復員の挨拶に行つたら、一カ月の有給休暇をもらった。丁度、林火先生

が山形県の東根温泉で行われる俳句大会へ招待されていたので同行した。途中福島県矢吹の野木杏青さんの家へ一泊した。翌日東北線の矢吹駅頭で目黒秩父に逢った。野木杏青さんは秩父が以前勤めていた鉄鋼会社の嘱託医師であり、俳句仲間であったので、偶然訪ねてきたのである。初対面であったが、誌上で名前を知っていたので旧知のような気持ちになつた。林火先生と三人で付近の紫雲英田に寝転びながら話をした。秩父は失職中で、あちこちへ行つて物資を求めて闇屋のようなことをやつていたが、うまい儲け口は見付からないようであった。私にいきなり「林火先生は俳句の先生としては立派であるが、世間一般の常識には疎いのでしっかりサポートしてくれよ」と依頼してきた。「先輩の佐野俊夫からも言われているので頼んだよ」とも言われた。そんな大事なことをいとも簡単に言うものだといささか驚いたのであった。

須賀川の牡丹園へも行ってみたが、戦時中の荒廃が癒え切れていなかった。

東根温泉の旅館の大広間で句会が行われた。その世話をされた田中灯京さんも来ておられた。選者は林火、灯京の二人、私は随伴であるのでのんびりしていた。俳句の質は新鮮味に欠けていたようであった。句会を終えて帰るにあ

たつて二升の白米を貰い、山寺へと回った。帰りに福島から飯坂温泉へ回った。白米持参なのでどこでも泊めてもらえた。私はシベリアから作品二百句を持って来ていて、飯坂の旅館で林火の選句を受けた。三十三句残って「濱」の七月号へ載せてもらった。この年の五月号で新同人の発表があったが、私はその後に帰還したので、発表のないままで同人作品に載せてもらい、そのままになってしまった。この時の旅で林火は次の句など六句を発表している。

長き停車林橋の花ゆ 虻が来る 昭23
げんげ田へみつばち放ちあるじ居ず 〃

この旅の山寺でのことである。大きな杉の木を見て、シベリアでの伐採のことを先生に解説したら、「もうシベリアのことは忘れるよ」とたしなめられた。

『白幡南町』の昭和三十三年に「終ひの蔵―柏原まで―」と題する一連の句がある。二月の一茶の里は深雪に埋もれていた。楠本憲吉氏の世話である。

冬 田より夕日の鴉 上 田城 昭32

はその途次の林火の句である。上田で蕎麦を食う時、蕎麦猪口へ寒卵を割っていたら一本の蕎麦のようにゆつくりと落ちた。零下の寒さであった。その夜は村上一葉子君

出来なかつた。地元の人々は私財を投じての一茶研究をあまり買つておらず、田畑を売ったりしたことを馬鹿扱いしていたようであった。その点、信濃町に住んでおられた清水哲君が一茶のために献身したのを高く評価されているのは幸せだといえよう。

それはさておき、柏原の脇本陣の中村家で、雪で晒した手打ち蕎麦をいただいた。これも楠本憲吉氏の世話である。私はこの蕎麦がうまくて三枚食べた。先生も健啖を示して三枚平らげた。清水哲君は「昼飯を食べて来たが、蕎麦は別腹だ」と言つて五枚も平らげていた。当主の中村氏に聞いたところでは、「信濃では月と仏とおらが蕎麦」とよく言うが、大正の初め頃蕎麦の消費が落ちたので、中村氏の先代が今でいえばコマージュのキャッチフレーズとして囃し立てた言葉だそうである。

この旅のあと楠本氏は長病みをしていた。旅の疲れで今までの体に負担をかけていたものが誘発されたのでないかと思つている。

同じ年、昭和三十三年の九月に林火先生の国内における一番長い旅が始まった。北海道を周遊する八泊九日の旅である。この旅で「北海道に遊ぶ」と題する四十二句を得て

の世話で別所温泉へ泊まった。宿の部屋は三階で風呂場は一階であった。風呂の温度が熱くないので入つてもななか出られなかつた。風呂から出て三階へ登る間にタオルはこちんこちに凍つてしまった。部屋で夕食をとっている間も、暖房は入っているが、背筋が冷や冷やとするのである。私も下戸ではあるが、酒を飲まねば背中の中冷や冷やが治らないので結構飲んだ。先生も楠本氏もそのようであった。後年の林火の句に「雨蛙不思議に酒の飲める夜や」があるが、「不思議に」飲める夜というのが時にはあるようである。

降る雪に終焉の蔵戸もなしや 昭32
釈一茶不退位雪積む位牌堂 〃

など五句が柏原での作である。この時に一茶記念館館長の清水哲君の世話になつた。

先に林火が金尾梅の門氏と昭和三十年の喪の正月を湯田中で過ごしたこと、「お晩です」と栗生純夫氏が訪ねて来たことを書いた。林火と同年の純夫氏は私財を投じて一茶の資料の収集と研究に打ち込まれた。今日の一茶の評価があるのは純夫氏の功績といつて過言ではない。私も田中屋に泊まつて、やはり純夫さんに会つたことがある。面白い話をしてもらったが、私は純夫氏と一言も話をするこ

いる。

この旅の同伴者は佐野俊夫、堀喬人、田中灯京と私である。旅行のプランを立て、宿泊旅館をセツトし、航空券や鉄道の周遊券を私が準備した。五名の旅行費用は総額二十五万円、それをすべて佐野俊夫氏が負担した。書きながら今気付いたことであるが、白幡南町の新築時に立て替えた資金が先生から完済されたので、それを充てたようである。一人当たり五万円であるが、まだそれほど物価が高くなかつたので大金であつた。なにしろ家の建築費用が九十万円の時代である。

飛行機で札幌へ飛び、寝台列車で釧路へ向かつた。釧路で少し見物したあと阿寒湖へ行き、阿寒湖泊。再び釧路経由で根室泊。翌日の納沙布へはジープをチャーターして行つたが、先生は神経痛の発作があつたため根室で一日中ゆつくりした。納沙布への道は舗装などしてない。窪地に入ると石がごろごろしていて、ジープの屋根のパイプに何回となく頭をぶつかりした。先生が来なくてよかつたと思つた。納沙布岬は霧が込めていて、齒舞島は見えず、水晶島の灯台のみ見えた。岬には人つ子一人いながつた。その日再び根室泊。また釧路へ戻つて美幌峠を越え、網走泊。翌日原生花園を見て、汽車で層雲峡へ行き宿泊。また汽車

で夕張炭礦へ行って泊まった。翌日汽車で登別へ行き宿泊。最終日は登別から千歳空港へという行程である。

先生の一生のうちただ一回の北海道旅行であった。私も彼所に休暇をもらって参加した。北海道の「濱」の会員とは会っていない。納涼の夢氏の母堂が美幌におられたのでお寄りし、漠の夢氏が出迎えてくれただけであった。九月の摩周湖は暗れていてその素晴らしさを見た。夕張では先生が夕張炭礦の従業員を集めて俳句の講演をされた。登別では芸者を呼んだが、花札をやつて先生がまんまと勝つてしまった。金沢の四高時代に花札を覚えたという。昔とつた杵柄である。帰つて来て「悪いことしてしまつたな」と後悔されていた。この旅で得た句は、

店々に海霧より揚げし青さんま 昭32
昆布の貨車と客車二輛の根室線 〃
どんころと農夫西日に影同じ 〃
かりがねの声の月トを重ならず 〃
渡り鳥微塵のごとしオホーツク 〃
白雲湧き薄荷とり入れに麦藁帽 〃
末枯や塚のごとくにアイヌチセ 〃
などの句が評判になつた。

『飛花集』の昭和四十五年の作品に、
山見えてすずしきもまた炉端なる 昭45
暮鳴いて百里来しとも思はれず 〃

など八句があつて、その前書に「越後塩沢関山、小野塚鈴宅泊」とある。小野塚鈴さんは「濱」の会員で、林火によれば民宿をやつていふという。ぜひお越し下さいという手紙をもらった林火が「山の中の一軒家で静かな所であるから」と勧めるので、「杉の実」の吟行会で出掛けた。さて行つて見ると、「山の中の一軒家」ではなく町中の家で、ご馳走といえば涼風だけである。台所へ入つても民宿らしい食材は全くない。夕食は不揃いの山女一匹ずつで、あとは漬物ばかり。お酒もなく、並んでいるのはすべて果実酒だけであつた。付近を歩いても物を売っている家は一軒もなく、大方の家は新湯の笹団子用の笹を干して置いての匂いのみちていた。とんでもない所へ来たものだと思つたが、手の打ちようがなかつた。もちろん林火先生に文句を言えるはずもなかつた。

翌日は暑い日だったが、裏山へ行こうと言うので出掛けた。鈴さんは籠を背負つていた。山の上へ出るとそこに小川が流れていた。木陰は極めて涼しかった。その辺を歩いて昼時になると、鈴さんは籠を下ろして鍋釜を出し、小さ

な釜で土を掘つて籠を造つた。そして持つて来た米を小川で洗い始めた。一同は薪を拾つて手助けした。小川の縁に座つて足を水に入れると暑さなどすっかり忘れてしまつた。鈴さんが飯を炊き始めた。さらに鍋に水を入れて味噌を入れた。味噌汁だろうが、具はどうするのだろうかと思つていたら、付近に生えている蓴を刈つて葉を取り、茎を洗つて味噌汁の中に入れた。飯の方は湯気を上げていた。

鈴さんは碗に炊き上がった飯を盛り、汁椀に蓴の味噌汁を入れてくれた。我々は沢庵をかじつて昼食を取つた。世の中でこんな旨い飯を食つたのは初めてであるような気がした。山には涼気がみちみちていた。これだけで昨日以来の不満が解消した。林火先生も杉の実会員に対して申し訳が立つたようであつた。

しかしながら、手紙だけで誘いに乗るべきではないとしてみじみ思つた。

命ありて立つ長城の薫風に 昭55

これは、昭和五十五年五月二十九日から六月七日にかけて行われた社団法人俳人協会訪中団の団長として中国へ赴き、長城に立つた時の林火の感慨である。この時、林火は俳人協会会長である。

この訪中団にはさまざまな経緯があつた。話は前に戻すが、昭和五十年を過ぎると日本の経済もすっかり立ち直つて、もはや戦後ではないという状況になり、多くの俳人が盛んに海外旅行をしては総合雑誌に大作を発表していた。そこで先生に「ヨーロッパへでも旅をしませんか」と誘つたら、「ヨーロッパやハラップパへは行きたいと思わないが、中国は日本の文化の原点であるからぜひ行ってみたい」と言う。私は早速俳人協会会長付きの村井隆君に話を持つて行つた。すると村井君は「中国へ観光団として行くのはつまらないから、俳人関係団体一丸として行こう」と言い出した。

訪中団として受け入れてもらうにはどうすればよいか、村井君も暗中模索した。そこで政治家や日中協会の方々に相談して知恵を借りたのである。在日中国大使館に目を着けた。村井君が大使館の守衛の話をししばりするようになった。大使館の事務官と接触する前にまず守衛から懐柔したのである。そのうちに大使館から、レセプションの上座に持たせる品物の依頼などがあつた。いよいよ事務官と接触を持つたかと思つていふうちに、大使館からレセプションをやるのでコンパニオンを五十名ほど世話をしてくださいかとの注文があつた。「若葉」の中火臣さんの関係し

ている女子高校の生徒を斡旋してもらったとも言っていた。まるで中国大使館の御用係のようなものであった。

村井君の頑張っている姿を見ていた林火先生も、さすがに「訪中団のことはもう諦めようか」と言っていた。その矢先に、中国大使館から訪中団として受け入れるので、責任者が正式の申込書を出せと言ってきた。ようやく俳人協会会長大野林火を代表とする訪中団が実現することになったのである。

村井隆君は俳人協会の「訪中団報告書」に、「成田空港の出発ロビーは強い西日をうけて暑かった。『とうとう行けることになったね』との大野林火団長の一言に私の脳裏にいろいろのことが、一瞬に点滅した。社団法人俳人協会訪中団の計画が話題になってから一年半の月日がすぎたが、その間、訪中実現のためにご協力いただいた藤波労働大臣、日中協会代表世話人の野田代議士、日中協会の白西事務局長、中国大使館の陳坑参事官、黄華先生にまず深く感謝申し上げたい」と書いている。「とうとう行けることになったね」の一言は村井君自身の思いであったかも知れないが、林火先生にとっては村井君への感謝の言葉である。訪中団に参加した人たちはそのような真側のことは一向知らなかったのである。村井君は黒子に徹して、いわばフィクサー

の役割を果たしていたので、俳人協会の関係者で彼のことをとやかく言う人もいた。しかし、俳句文学館の建設は村井隆君の力がなかったら出来なかったことだけは確かである。その種々のいきさつを知っているのは私だけとなつてしまっている。

さて、訪中団の団長として先生は念願の中国の大地に立つたわけである。感無量であつたと思う。我々訪中団は入国手続きは一切やらず、空港の別の出口から招待所に案内された。その間林火先生の手荷物を中国の女性がすつと持つて行つた。それを見ていた岸風三樓さんが「よく平気で見ず知らずの人に手荷物を渡せるね」と感心していたが、林火先生は「我々は胸に名札を付けているので、中国の女性には訪中団の団長と認識して持つて行かれたのでしょうか」と平気な顔をされていた。空港の招待室で林火先生は林林先生に会つて握手をするなり、旧知の間柄のようにすぐ肝胆相照らす仲となつてしまつた。互いに名前に「林」の字がある親しみにもよろうか。

ところで、私は前もつて林火先生に「杉本寛さんに訪中団に参加してもらおうようにして下さい」と頼んでいた。杉本さんの父君は戦前から中国の方々と親交があり、中国との交流が再開する前から力を尽くされておられ、その仕事

の過程において北京で客死されていた。中国要人がその労苦を多とし、北京で父君の立派な葬儀をしてくれたということも聞いていた。杉本さん夫妻は遺骨の受領に行かれた際に、中国側から招待を受けてあちこち回つており、中国の要人との交流がある。訪中団の一員に杉本さんがいれば何かと便宜が得られると思つたからである。その思いはその通りになつた。訪中二日目に中国側主催の招待宴が北海公園の彷彿餐厅で催された。その宴席へ中国対外友好協会副会長の孫平化先生が突然出席してくれたのである。孫先生は訪中団の名簿の中に杉本さんの名があつたので出掛けて来たといわれた。孫先生が招待宴へ出席されたことによつて俳人協会の格が上がり、その後の取り扱いが丁重を極めてきたのであつた。

昭和五十六年十一月に第二回目の訪中団が旅立つたが、この時は前回と異なり少々変則的であつた。同員は林火団長以下、柳川静爾楼(本名誠二郎、元日本航空社長)、同秘書、安住敦、村井隆と私の六名である。柳田氏と秘書は二、三日早めに出掛けて日本航空の新路線開設の交渉を北京で行つており、村井君も事前に行つていて、北京で合流した。私の八丁堀の事務所に林火先生と安住さんに集まっ

てもらつて、三人で成田空港へ出掛けた。それまでの世話は旅行社がやつてくれたが、北京までは三名だけであつた。出掛けるまでもに事情があつた。安住さんは「ぜひ林火さんと中国へ出掛けたい」と言つていたが、林火先生は体の不調を理由になかなか腰を上げようとしなかつた。そこで私と村井君で相談の上、林林先生から協会宛ての親書を書いていただいた。「切に御米訪を待つ」という主旨の手紙である。林火先生はそれを見て「林林先生がお待ちになつているというのであれば行かざるを得ない」と言つて了解したのであつた。その時の旅は北京と西安だけで、北京の宿舍は友好協会宿泊所、かつての蔣介石の北京における宿舍で胡洞の中にある四合院であつた。林林先生は全人代と重なつてしまつたので西安へは案内していただかなかつたが、鄭均民先生が案内してくれた。

二度の訪中で、先生が連日の中国料理に飽きて食べられなくなるのを恐れた私は、トランクの中に日本の菓子、羊羹などを一杯入れて行つた。また先生の間食のためのインスタントコーヒー、紅茶、さらに醬油、砂糖、塩、梅干しなども持つて行つた。私の手荷物の中にはいつも菓子などが入つていたので他の人々よりも大きくふくれていた。旅

行中最も喜ばれたのは高級かき餅であった。

林火先生が毎日持ち歩く手荷物、私が自分の荷物とぶつ違いに二つ掛けた。先生のトランクの整理はすべて私がやったが、それを見ていた安住さんが「俺のもやってくれよ」と言われたので、最後の荷物の整理だけはして差し上げた。第一回、第二回とも参加費用を集めて私が腹巻に巻いて行った。

④ 林火と私

私たちが同級生（林火の教え子）に案内してもらって林火宅へ伺ったのは昭和十四年四月であった。当時の林火宅は井土ヶ谷下町にあり、学校も井土ヶ谷町にあったので、学校が引けてから連れ立って歩いて行った。途中の菓子屋で袋菓子を買って行ったのを覚えていて、我々が伺った時林火は留守であった。母堂が出られて、「正はすぐ帰ると思いますので、上がって待っていて下さい」と言われた。玄関の次の八畳間で待っていたら、やがて帰って来られた。年嵩の奥村一郎が五、六人で入門したいということを述べた。林火が「君たち、切角来たのだから句を持っていてるらう」と言ったので、それぞれ自分の書いた句を出して批評をもらった。私の番が最後であった。私は奥村君と

前年から「馬酔木」に投句して入選していたので、よい評を受けると思っていた。奥村君はどうやらよい評をもらっていたが、私の句稿を見て先生はいきなり、「お前、何を言いたいんだ。何を詠いたいんだ」と巻舌で言われた。言われた途端に頭の中に血がのぼり、顔が真っ赤になってしまつて、何一つ答えられなかった。教室の一番後ろに座つて講義も聞かず、一生懸命誓子調の句を作つて持つて行ったのであるが、言葉の羅列で内容の乏しい句だったのである。それから、その不名誉を挽回すべく十句くらい持つては先生の所へ通うこととなった。

井土ヶ谷下町の林火宅には風呂がなかったが、すぐ前に大きな銭湯があったので風呂をかかえているようである。林火は銭湯の開く午後三時にいつも入浴していた。一度一緒に入ったことがあるが、あまり明るくてきまり悪い感じであったことを覚えていて、木の桶をちよつと置いて大きく響き合っていた。

同じ年の夏、奥村君らと私が林火の案内で吟行をした。横浜線の淵野辺で下車し、相模川の土手まで真っ直ぐに歩き、上手沿いに半原などを通つて町田へ帰つてきた。先生の作品は「石楠」に載っていないが、若い我々もこれといつて残る句は作っていない。相模川の河原で先生と一緒に

水切りをしたことだけが記憶に残っている。その夏休みに中村草田男句集「長子」の輪講をした。先生の持つている本を借りて、鉄筆で活字体に切つて謄写版刷りにして皆に渡した。今も「長子」の句は忘れていない句が多くある。

その年の九月に入つての第二日曜日であつたと思う。午後二時頃林火宅へ行ったら、母堂が「もうそろそろ帰る頃ですから」と言われたので、八畳間で待つていた。十分ほどたつて先生はここにこして、喜びではち切れそうな顔で帰つて来た。「今日は楸邨君の世話で秋櫻子先生にお会いして来たんだよ」と言つた。「海門」を贈呈したら、ぜひ会いたいとおっしゃるので、行つて来たんだよ」とも付け加えた。句集「海門」の発行日は奥付では昭和十四年九月となつてはいるが、実際には上梓されたのは一カ月くらい早かつたようである。秋櫻子に会うのがそんなに嬉しいのかと、駆け出しの我々には思えたのであるが、当時の水原秋櫻子先生は近代俳句の旗頭として全俳壇の注目を浴びていた方である。他の結社の新人に会いたいといわれるのは大変な名誉なのであつた。

ここで加藤楸邨の名前が出るが、林火と楸邨は昭和十年から親交があつた。その頃「馬酔木」は盛んに連作俳句を発表していたが、その良否についてはこの結社も批評し

なかつた。「石楠」はアンチ・ホトトギスを標榜しており、連作俳句にも不賛成であつたので「連作批評」の座談会を特集した。メンバーは林原未井、大野林火、篠原梵、八木絵馬、川島彷徨子らの面々であつた。その特集がきっかけとなつて林火と楸邨は互いに意気投合して、しばしば神田三崎町にあつた馬酔木発行所で会つていたのである。楸邨先生が神田三崎町のエレベーターホールに落ちるといふ事件があつたが、その現場にも林火は立ち合つていた。林火が晩年「朝日俳壇」の選者になつたのも加藤楸邨の推薦によるものである。私は林火に師事する以前に楸邨への入門を乞うて、学生の身だからと断られ、林火を推薦してもらつてはいる。そのような関係もあつて、楸邨先生とは私自身も親しくさせていたのだ。また、秋櫻子先生には「濱」五十号記念大会と二百号記念大会には講演をお願いするなど、たいへんお世話になつてはいるのだが、その原点が「海門」出版のこの昭和十四年にあるのである。

林火先生が私の家に来てくれたのは、たつた三回である。昭和十六年に発表された、

壮行や冬雲私ふ風募りつ

には前書に「松崎敏雄君を送る」とある。壮行会は昭和

十五年十二月十三日の晩であり、翌十四日に軍用列車で東神奈川駅を出発した。壮行会の日は町内に三人の出征者があった。本牧町には神社が二つあり、私の家は南部だったので吾妻神社の社頭で壮行会が行われた。その日は風が強く吹いたがそれほど寒くはなかった。林火先生は家まで挨拶に来てくれて、列に加わって下さった。これが私の家に来てくれた最初であった。「帰ったら句集を出してやるからしつかり作って来いよ」と言われた。現地から「石楠」へ投句するのだが、直接にはない。毎月林火先生へ作品を送った。そして送れば必ず載せてもらっていた。

二回目は昭和二十六年秋で、林火夫妻に仲人を頼んだ折であった。妻の里の小田原の風習にならって婿が妻を迎えに行くのである。林火夫妻と一緒に小田原の妻の実家へ行き、祝盃を上げ、妻を伴って、横浜の本牧の家へ帰って来た。結婚式は自宅で行った。強風の日で、挙式の間に停電があつて、百目蠟燭を点してやったので幻想的であつた。

第三回目は昭和三十年暮である。その当時、暮の休みの初日である十二月二十八日には神棚の真鍮の道具を磨くのが毎年の私の仕事であつた。例年通りに縁側の日向で磨いていたら、午後一時頃、「よう！」と声を掛けて縁側の前へ林火先生が立たれた。びっくりして「何かあつたのです

か」と聞いてしまった。「八王子海岸へ行って句を作りたいんだ」と先生は言った。

八王子海岸は私の家から歩いて五分のところにある。一人乗りの釣舟が常に十二、三艘ある程度の本牧鼻の崖下の狭い浜である。夏は旧横浜商業中学（Y校）の海水浴場であつた。今は埋め立てられて小公園になっている。私の子供の時の海水浴場でもあつた。

先生はお茶一杯飲んだだけでさつきと行ってしまったが、その時の作品七句は「文藝春秋」の昭和三十一年三月号に「立春」の題で出ていた。

海苔採の影のくろぐる浪に伸ぶ

海苔採の眼のしよぼしよぼと北風まとふ

洗はれて櫓櫓細身や注連飾

などあるが、私は最後の一句が好きである。いかにも八王子海岸らしさが出ている。句集『白幡南町』には「本牧海苔場」という題で収録されている。

この他にもいろいろ書き付けたのであるが、頁数の関係もあるので省略する。

